



DALS ニュースレター No. 9

東京大学

21世紀COEプログラム

生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築

*Construction of Death and Life Studies concerning Culture and Value of Life*

2005年5月9日

## 目次

巻頭エッセイ「死と無限」

武川正吾

エッセイ「生命倫理学と学部族の争い」

児玉聡

研究会・シンポジウム報告

広瀬巖氏講演研究会「個人間集計とその制限」報告

一ノ瀬正樹

杜維明教授の2つの共催講演研究会の報告

島園進

杜維明教授公開講演会「思孟学派初探」報告

小島毅

杜維明氏の国際宗教学宗教史会議での基調講演 報告

市川裕

今後の予定

ニール・クラウス博士 講演研究会「宗教、エイジング、健康の関連」予告

金児恵・秋山弘子

本プログラム機関誌『死生学研究』第5号(2005年春号) 目次

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku>



## 死と無限

武川 正吾

妙な因縁から「死生学の構築」という COE プログラムの「事業推進担当者」ということになってしまった。もちろん死生学についてはまったくの素人である。ただこのプロジェクトの「生命活動の発現としての人間観の検討」を行う部会がケアについて取り上げることとなり、この点に関する社会学的な検討の必要を感じた拠点リーダーが、私に白羽の矢を立てたのだと思う。

私が社会学の研究を始めたころは、ワープロで「かいご」と入力すると「悔悟」としか変換されないような時代だったので、ケアがこのように人文社会系のアカデミックな研究対象となったことに関して昔日の感を禁じえない。しかしいまこの点について書こうとは思わない。というのは、昨年開催された本 COE のシンポジウム(死生観とケアの現場 第1部 「死生のケア・教育・文化の課題」)に討論者として参加して、別の点で触発されることが多かったからである。

教育学部の西平直氏のこのときの報告は、私がいろいろなことを思い出すキッカケとなった。氏は、学生の回想や手記を利用しながら、幼年期や少年期における「性と生と死」をめぐる彼女らの微妙な心的葛藤を描き出したが、そのなかに「死に対する恐怖」や「無限に対する恐怖」への言及があったのである。この指摘はしばらく忘却のなかにあった私の記憶の断片を甦らせた。

死は青年期と結びつけられて理解されることが多い。自殺率は高齢期とともに青年期で高い。生と死について思い悩むのは青年期の特徴だと一般には考えられている。しかし氏が報告した事例と同様、私の場合も、これまでの人生のなかで死を最も強く意識したのは青年期ではなくて、他ならぬ少年期であった。そのころの私は、ある時期、死に対する言いしれぬ恐怖に襲われ、容易に寝付けなかった。このできごとは私の個人的欠陥に由来するものだと思っていたので、しばらく他言することはなかった。ところが同様の体験を、しかも中学生や高校生ではなく小学生のときに味わったことがあるという人間に、その後何人か出会った。そのうちの一人は、友だちに死の恐怖について語り、一人で悩むのではなく、互いに慰めあうという経験をもっていた。

と、そんなことをシンポジウムの席上で思い出していたところ、この種の恐怖感は、私の場合、さらに幼年期にまで遡ることに気づいた。それは死への恐怖ではなく、無限への恐怖とでも呼ぶべきものである。宇宙が無限であるとして、宇宙船に乗ってどこまでも進んで行ったらどうなるのだろうか、といったようなことを真剣に考えて、結局は答えが出ないということに気づき、このことに恐れおののいた。幼年期のことである。これも個人の特性に根差す特異な体験だと片づけていたが、シンポジウムの質疑応答のなかで「幼年期における無限への恐怖」についての言及が報告者からあり、同様の体験の持ち主が他にもいることを知って驚いた。

人生において最も哲学的な時代は青年期だと言われる。青年は愛に悩み、性に悩み、仕事に悩みというのが、その説明である。しかし、はたしてそうであろうか。少年期や幼年期の方が存在論の課題に正面から取り組んでいるという意味で哲学的であるとはいえないだろうか。あるいは人間の心的発達も個体発生は系統発生を繰り返しているのだろうか。

## 生命倫理学と学部族の争い

児玉 聡

プラトンの『国家』にギュゲスの指輪の話が出てくる。指輪によって透明になれたとしても、人は不正を犯すべきではないのか、という話だ。キケロは『義務について』の中でこの話に触れ、「あまり明敏の士でもない一部の哲学者達」が、この話の意義を理解せずに、「かかる仮定条件(=もし誰にも知られることがなければという条件)は不可能だ」と論難して取り合おうとしないと述べている。

同じことが私や同僚が医学部で教える生命倫理学の授業でも起きる。たとえばトムソンのバイオリニストの例について、そんなことはありえないから論じるに足りない、と議論にならないことがある。ハリスのサバイバル・ロッターにしても、そのような絵空事を学んでも仕方がないと言われる。戯画的に描けば、医学部族(この中には学生だけでなく、社会人コースを受講するいわゆる「現場の人々」も含まれる)の多くは、「何をなすべきか」について、直ちに解決の必要な問題を抱えているため、推論や考え方のプロセスを学ぶよりも、その産物である解決策の提示を求める。このような態度が如実に表れる一例として、医学部では思弁的で一義的な解答を出すことのできない生命倫理学の授業よりも、すぐ実践に役立つ医事法やリスクマネジメントの授業の方が好まれるということが挙げられる。覚えても酒の席ぐらいでしか役に立たないトムソンやハリスの議論を学ぶよりも、判例や倫理指針の一つでも覚えた方がよっぽど実践の役に立つというわけだ。『ゴルギアス』を読んだことのある医学部族の人なら、文学部族(主に哲学科)の人に「哲学はもういい加減にやめにして、それよりももっと重要な仕事へ向かう」よう、カリクレスよろしく説くかもしれない。

また、医学部では概して文学部よりも時間の流れが早い。医学系の論文の大半は1ページから数ページであり、学会発表も質問時間を含めて20分あれば長い方である。対して哲学系の論文は通常は数十ページであり、学会発表は質問時間を含めて40分かそれ以上が普通である。学術誌も医学系では月一回発行はざらである。話は飛ぶが、本郷の医学図書館にあった1980年以前の洋雑誌は、昨年末に柏図書館に移管されてしまったが、これは文学部ならまず考えられない。ゾウとネズミぐらいと言えば大げさになるが、文学部と医学部では時間の流れが明らかに違う。

このように、医学部の気質は文学部のものとはずいぶん異なる。再び戯画的に描くなら、文学部族は問題提起はするものの、解決までのプロセスを重んじ、直ちに解決できなくても気にしない。それに対して医学部族はプロセスよりも結果を重視し、暫定的でもよいからとにかく解決策を求める。学際的な学問分野である生命倫理学は、異なるバックグラウンドを持つ人々が一堂に会する場 - - もっと卑俗に言えばタコツボから出たタコ同士が交流する場 - - であり、医学部族にしる、文学部族にしる、法学部族にしる、経済学部族にしる、それぞれが異文化コミュニケーションを円滑に行う努力をしなければならない。たとえば、医学部族の人々は、トムソンやハリスの議論の検討を通して現在持っている倫理的直観と思考のプロセスに目を向け、ときにそれを疑ってみることを学ばなければならない。また、文学部族の人々は、理論を実践に近づける不断の努力をし、せっかちな医学部族の人々に合わせて、問題点を指摘するだけでなく解決策を見つける努力もしなければならない。こうした部族間の相互理解と寛容と歩み寄りがあって初めて生命倫理学という学問領域が真に学際的な研究として根付き、発展することができるだろう。

## 広瀬巖氏講演研究会「個人間集計とその制限」報告

— 瀬 正 樹

去る 2005 年 4 月 8 日、東京大学文学部哲学研究室にて午後 4 時より、広瀬巖氏講演研究会・「個人間集計とその制限(Aggregation and the Individualistic Restriction)」が開催された。新学期早々の時期ではあったが、広く広報していたこともあり、さまざまな分野から 30 人ほどの人々が参加した。広瀬巖氏は、スコットランドの St Andrews 大学で学んだ後、現在は英国 Oxford 大学 University College のフェロウの職に就き、倫理学・正義論を研究している若き日本人研究者である。筆者は、在外研究で Oxford に滞在しているときに広瀬氏と知己を得ており、この四月にたまたま日本に一時帰国するというので、講演会が実現することになった次第である。

さて、広瀬氏は、今回、多数の個人の道徳的な価値を合算することによって道徳的判断の是非を決めるという考え方を「個人間集計」として主題化し、それに対する反論を検討する、という筋道の話をしてくれた。直ちに明らかなように、「個人間集計」の考え方に反対するということは、功利主義を批判することにほかならない。しかし、広瀬氏は、功利主義が含意する帰結主義の考え方と照らし合わせて、個人間集計の考え方と帰結主義とは同値ではないという論点を導き、個人間集計批判は功利主義批判になるが、その逆は必ずしも成立しない、と論じる。そうした視点から、ロールズとスキャンロンという現代の二人の倫理学者の議論を取りあげ、丁寧に反駁していく。すなわち、ロールズ流の個人の個性性を重視した観点からの功利主義批判は個人間集計批判には必ずしも結びつかないし、スキャンロンの個人の観点に基づく契約主義からする個人間集計批判は議論に不整合を抱えている、と論じたのである。そして最後に、女性に対するほんのわずかな道徳的不都合が個人間で合算され世界全体で集計されると、女性の人口が期待される数より少なくなるという事態、すなわち「消えた女性」と呼ばれる事態、に至るというアマルティア・センの議論を取りあげ、個人間集計の考え方を道徳的配慮から排除する理由はない、と結論づけた。アップ・トゥー・デイトな論争にコミットした、きわめて刺激的な講演で、質疑の時間にも議論は大いに盛り上がった。なかでも、一見トリッキーな想定例が多用されたので、そうした例に基づく議論のステイタスについて質問が集中した。広瀬氏は、道徳の原理について考察するためには、純粋な事態を想定して、ことさら争点が明らかとなるようにすることは必要なプロセスだと応答してくれた。筆者自身も質問し、集計というからには集計する範囲、あるいはデータを集めるときの母集団、が何であるかを決定しなければ意味をなさないが、個人間集計の考え方に母集団に対する決定原理は含まれているのか、という問いを提起した。筆者の頭にあったのは、アメリカのイラク派兵に関して、アメリカの保守派の人々の価値観を集計した場合と、イラクの国民で集計した場合とで、明らかに集計結果が異なり、道徳判断も異なるだろう、といった問題であった。広瀬氏は、その問題は別個に論じるべきもので、個人間集計だけで道徳の議論が尽くされるわけではないと応じてくれた。まことに内容の濃い、有意義な時間であった。講演後、出席者の何人かが広瀬氏と夕食をともし、さらに議論を続けた。同じ日本人として、Oxford で活躍する広瀬氏に、学生諸君は大いに啓発・刺激されていたように思える。「死生学」の活動がまた一つ深みを増したことを大いに実感した。

## 杜維明教授の2つの共催講演研究会の報告

島 園 進

21世紀COE「死生学」の特任教授として滞在された杜維明(Tu Weiming)教授には、いくつもの学問的対話の集いで日本の研究者との刺激的な交流をしていただいた。ここでは、4月4日に東大駒場キャンパスにおいて、東大総合文化研究科の21世紀COE「共生のための国際哲学センター」との共同主催で行われた講演研究会「啓蒙主義的思考法への儒家的反省」(以下、「啓蒙主義」講演と略す)と、4月7日に大塚の筑波大学東京キャンパスにおいて、筑波大学哲学思想研究会との共同主催で行われた講演研究会「儒教的ヒューマンイズムの創造的展開に対する宗教的反省」(以下、「宗教的反省」講演と略す)について報告する。前者は英語で、後者は日中同時通訳つきの中国語で行われた。



「啓蒙主義」講演は西洋思想になじみの深い聴衆を想定したものである。杜教授は儒教は現実世界を重視し、彼岸の次元に過度に関心をもつことを慎むものであるとする。死後の世界に期待を抱いたり、「永遠の生」といった観念に重きを置いたりすることがない。その意味で儒教はヒューマンイズムであり、啓蒙主義に通じる側面を多分に含んでいるという。しかし、それでは世俗を世俗としてのみ重んじる立場、人間中心主義の立場かというところではない。儒教の価値は既存の権力や現世的秩序の強化を志向するものとする解釈は謝っている。儒教は元来、人権を抑圧する性質のものだという解釈は儒教の核心に対する誤解によるものだ。啓蒙主義の立場からの儒教への批判はあたらない。だが、儒教は啓蒙主義の要求に応えることができるだけでなく、啓蒙主義を超えるものでもある。現代西洋の思想が啓蒙主義の限界を克服できずに行き悩んでいるとすれば、儒教には啓蒙主義に欠けている次元を指し示し、新たなグローバルな思考の拡充に貢献できるだろう。

「宗教的反省」講演は中国思想になじみの深い聴衆を想定しつつ、現代世界における儒教思想の意義を説こうとしたものである。儒教は社会倫理的な教育思想として見られがちだが、倫理学であるにとどまらず現世を超える次元をもっており、個の修養が家族・国家の次元を踏まえながら宇宙的次元にまで至る内容をもっている。個人の生死の問題を重んじながら、社会的現実を軽んじることなく、「天」すなわち超越性に参照軸をもつはずのものである。逆に超越的な理念はつねに地上的身体的な次元に根ざしたものとしてみとらえられる。孟子が「心を尽し性を知り天を知る」というのは、こうした儒教の思想構造を的確に表現している。美学・倫理・宗教が一体となっているのであり、H・フィンガレットが目撃したように「俗を以て聖となす」思想である。自己、共同体、自然、天道という4つの分割できない次元に関わるとし、天地万物との一体性を説く儒教の宗教性のあり方は、世界の諸宗教の中でも独自の位置を占めるもので、文明の対話を通してさらに豊かな境地を目指していくべきものである。

杜維明氏の講演は、(1)儒教を上下関係を重んずる伝統的モラルの擁護者ととらえる見方と、(2)宗教的な次元が乏しく現世的な社会秩序や人間関係に主たる関心を置くものだとする見方の双方を覆し、(a)自由や平等の理念に即応しつつ、西洋近代思想の隘路を越えていくことができるような特徴をもったものとして、また、(b)超越的な次元をもちつつ、孤立した自己意識(主体)という人間像に陥らず、他者や世界との交わりの中にある者として人間をとらえようとするもの

である。現代的文脈の中での儒教のポジティブな可能性に注目して、それを「宗教」の期待される発展の方向性を示すものとしても理解する。だが、現代思想として儒教を押し出すことによって、現実の儒教の多くが説明されずにすまされることにならないだろうか。また、このような知識人先導の思想運動が、実際に現代の中国文明を再活性化する展望をもちうるのだろうか。このような観点から質問が投げかけられ、活発な討議が進められた。4月23日のシンポジウム「儒教における生と死」が死生学の問題を正面から扱うものであったとすれば、この二つの講演研究会の討議は、死生学的理解の前提となる儒教の現代的実践的理解について問いかけるものであった。

## 杜維明教授公開講演会「思孟学派初探」報告

小島 毅



4月14日(木)午後1時から3時まで、文学部1号館215番教室を会場として、特任教授杜維明氏による公開講演会が行われ、約30名の参加者があった。

報告題目の「思孟学派初探」とは、「子思(孔子の孫)と孟子の学派についての初步的考察」という意味である。かつて、司馬遷『史記』にそう記載されているように、儒教の伝承では孟子は子思の門人に学んだとされていた。近代の文献学的研究は、この伝承に客観性がないことから、子思の作とされてきた『中庸』は孟子よりも後の時代のもので、子

思本人とは直接の関係はないとみなすようになった。ところが、近年、湖北省の郭店という場所から紀元前4世紀末頃のものと思われる墓が発掘され、『中庸』の内容と重なる文献が出土したため、この系譜問題がふたたび見直されるようになっている。杜氏の講演は、こうした経緯の紹介と、氏自身の孟子思想の解釈についての見解を述べたものであった。

講演後、郭店の出土文献研究の専門家である李承律氏(人文社会系研究科専任講師)から、この墓の年代についての疑問が提起された。杜氏は答弁のなかで李氏の意見に理解を示し、考古学者の年代推定と思想史学者の系譜構想との齟齬については、今後とも慎重な検討が必要である旨の見解を述べた。

当日、中国語通訳にあたった廣瀬薫雄氏(人文社会系研究科博士課程院生)は、この話題についての専門家だということもあって、よどみなくわかりやすい通訳をしてくれた。授業時間の関係で会場では十分な質疑応答の時間が取れなかったが、その後、場所を赤門総合研究棟の中国思想文化学研究室に移して杜氏を囲む茶話会を行い、哲学専攻や文学専攻の大学院生たちから熱のこもった質問が提起され、杜氏はその一つ一つに丁寧に答えていた。茶話会は午後5時に散会した。

# 杜維明氏の国際宗教学宗教史会議での基調講演 COE 研究の一環として

市川 裕

COE 死生学で招聘中の杜維明教授は、死生学研究のうち、諸文明の宗教思想における死生観と現代の諸潮流との葛藤と融合という問題群と深く関わっている。特に、教授は儒教の本来的価値を現代的に再評価する課題に果敢に挑戦する第一人者であるゆえに、本 COE で手薄とされた東アジアの思想分野を補強する最適の研究者として、その貢献が大いに期待されている。

本 COE の宗教思想部門では、これまで 2 領域の問題が重点的に扱われてきた。第一は、科学技術の驚異的な発展によって生じている生命誕生の瞬間と終了の瞬間をめぐる問題群であり、第二が伝統的宗教思想の現代的課題に対する挑戦という問題群である。杜教授は第二の領域で海外から招聘した研究者であり、一昨年のヒレル・レヴィン教授（ボストン大学）に次いで二人目である。

これまでの 2 週間余りの滞在中に行なわれた杜教授の最初の貢献は、本年 3 月 24 日から 30 日まで東京で開催された国際宗教学宗教史会議で、その初日に行なわれた公開シンポジウムにおける基調講演である。本国際会議は、本 COE の代表者である島園教授が、日本宗教学会会長として実行委員長となり、陣頭指揮を執って実施されたものである。総合テーマに「宗教 相克と平和」を掲げ、初日の公開シンポジウムにおいて、「文明間の対話と宗教」をテーマに、4 名の識者に基調講演をお願いし、その一人として杜教授に依頼した。

杜教授の講演題目は、「対話的文明に向けて 公的知識人としての宗教指導者」というものであった。これは、既成の伝統的な諸宗教の指導者たちが、その本来の宗教共同体の枠を超えて、現代の諸問題に対して態度を明らかにし、公共の場で責任を持って発言し、相互の対話を進めていく使命があることを提言したものである。こうした役割を担う人々を、教授は「公的知識人」と呼び、民衆と直結する宗教指導者がこの役割を果たすことによって、草の根のレベルで共同体同士の相互理解が促され、自己啓発が活性化し、それを通して多様性を認め合う地球規模の共存の実現を目指している。

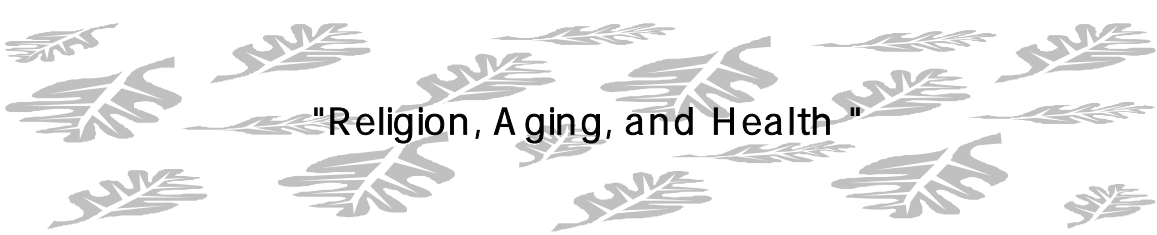
杜教授の発想には、死生学の視点から見て、斬新で画期的と思われる論点が提示されていた。その最大のもは、現世の再評価である。宗教指導者とは、本来、現世を相対化して、それを越えたところに宗教本来の形而上学的、存在論的価値の源泉を見出してきた。例えば、超越とか永遠、無限なるもの、来世や彼岸、天国、永遠の生命というような諸観念を根本に据えてきた。ところが、そうした指導者が公的知識人としての役割を担うためには、新たな現世的価値を本質的なものとして承認することになる、というのである。そうした価値として挙げられるのは、「地球の神聖性」や、「人類家族の尊厳性」、そして「地上の現世における生命界の内在的価値」といったことである。

これは、いかなる宗教を信奉するにせよ、人間として地球に共同生活を営む以上は、必ず共有しなければならない価値があるということを、



積極的に主張しているかのようである。これは現代の儒者にして語れることなのか。しかし、そうした価値は、宗教の超越性を制約するほどに普遍的なもの足りうるのか、その内実はどう確定できるのか、これらの価値はそもそもどこに由来するものなのか、どのようにして各宗教の諸価値と折り合いをつけるのか等々、興味は尽きない。





## ニール・クラウス博士講演研究会 予告

### "Religion, Aging, and Health"

(宗教、エイジング、健康の関連)

金 児 恵 ・ 秋 山 弘 子

身体と精神が深く関わっていることは古くから知られているが、近年、宗教が人の健康に及ぼす影響を科学的に究明しようとする学際的な研究が欧米を中心に活発に行われ、大きな潮流となっている。身体的機能、社会的役割、人間関係において喪失を経験することの多い高齢者の健康に宗教が緩衝効果をもつメカニズム、ストレス対処過程における宗教の複数機能、手術を含む治療場面や快復期の患者に対するスピリチュアリティ専門家による介入の効用など、次々に画期的な研究結果が報告されている。そうした研究成果は研究者のみならず、医療、福祉、教育に携わる幅広い層の人々から注目を集めている。近年、日本においても宗教やスピリチュアリティへの関心の高まりがみられるが、このたび、長年にわたって宗教と健康との関わりを研究してこられたニール・クラウス (Neal Krause) 博士にお話をさせていただくこととなった。

クラウス博士は、現在ミシガン大学公衆衛生学部教授であり、同大学老年学研究所の研究教授も兼任されている。研究テーマは、高齢期におけるストレスと健康と宗教の関連、であり、博士はこの分野の第一人者として知られる。一連の研究は米国国立老化研究所 (the National Institute on Aging) の助成を受けている。クラウス博士はまた、ミシガン大学と東京都老人総合研究所が共同で1987年から18年間にわたって実施している「老研 - ミシガン大 全国高齢者パネル調査」のメンバーであり、日本の高齢者についても理解が深い。

本講演研究会では、欧米における宗教と健康に関する研究の動向や、日本において同様の研究を行う場合の問題と課題などについてお話をさせていただく予定である。

テーマ："Religion, Aging, and Health" (宗教、エイジング、健康の関連)

日時：2005年5月31日(火) 17:00~18:30

場所：東京大学(本郷キャンパス) 法文2号館1大教室

講演者：ニール・クラウス博士 (通訳が入る予定です)

詳しくは、ホームページ (<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku>) でご確認下さい。

# 本プログラム機関誌『死生学研究』第5号(2005年春号)発刊!

## 目次

- 島蘭 進 「生命の価値と宗教文化：生命科学技術と生命倫理をめぐる文化交渉の必要性」  
金子 昭 「臨床現場における宗教的言説：天理教の病いの論しについて」  
河 正子 「わが国緩和ケア病棟入院中の終末期がん患者のスピリチュアルペイン」  
榊原哲也 「死生のケアの現象学：ベナー/ルーベルの現象学的看護論を手がかりにして」  
大谷いづみ 「太田典礼小論：安楽死思想の彼岸と此岸」  
前川健一 「治病者としての明恵：修法から授戒へ」  
太田貴之 「『女殺油地獄』：地獄と業」  
田中 均 「『死は我々の生をロマン化する原理である』：ノヴァーリスの一七九七年の日記・書簡と『ロマン化』の詩学」

## シンポジウム「死生観とケアの現場」：第1部「死生のケア・教育・文化の課題」報告

島蘭進・竹内整一 主旨

### 報告と討議1

- アラン・ケリヒア 「死生におけるケア・教育・文化の可能性：公衆衛生(Public Health)からの視野」  
河 正子 「死生のケア：わが国の緩和ケア臨床での経験」  
大谷いづみ 「『生と死の教育』のポリティクス：『生と死の語り方』を再考する」

### 討議記録

### 報告と討議2

- 西平 直 「子どもの心の中の性：性の理解・死の理解」  
岩田文昭 「<死生に関する教育>の範囲と原理」

### 討議記録

## 講演研究会

- ピーター・シャーバー 「幹細胞研究は許されるべきか」  
フレデリック・ブッチャー 「適応度、確率、自然選択の原理」  
アレックス・ローゼンバーグ

- 木村 覚 「『死者』とともに踊る：暗黒舞踏の方法における一局面」  
新田智通 「仏教とSOL：現代の仏教者による「生命の偶像崇拜」に関する一考察」  
井口高志 「新しい『痴呆ケア』とは何か?：政策言説における痴呆への『働きかけ』の変容過程から」

# 事業推進担当者

( 拠点リーダー )

島園 進 <宗教学>

竹内 整一 <倫理学・拠点リーダー代理>

( 第一部会：死生学の実践哲学的再検討 )

熊野 純彦 <倫理学・世話人>

一ノ瀬 正樹 <哲学・世話人>

松永 澄夫 <哲学>

関根 清三 <倫理学>

榊原 哲也 <哲学>

( 第二部会：生と死の形象と死生観 )

小佐野 重利 <美術史・世話人>

木下 直之 <文化資源学>

大貫 静夫 <考古学>

( 第三部会：死生観をめぐる文明と価値観 )

下田 正弘 <インド哲学仏教学・世話人>

多田 一臣 <国文学>

市川 裕 <宗教学>

池澤 優 <宗教学>

小島 毅 ( 中国思想文化学 )

( 第四部会：生命活動の発現としての人間観の検討 )

武川 正吾 <社会学・世話人>

横澤 一彦 <心理学>

立花 政夫 <心理学>

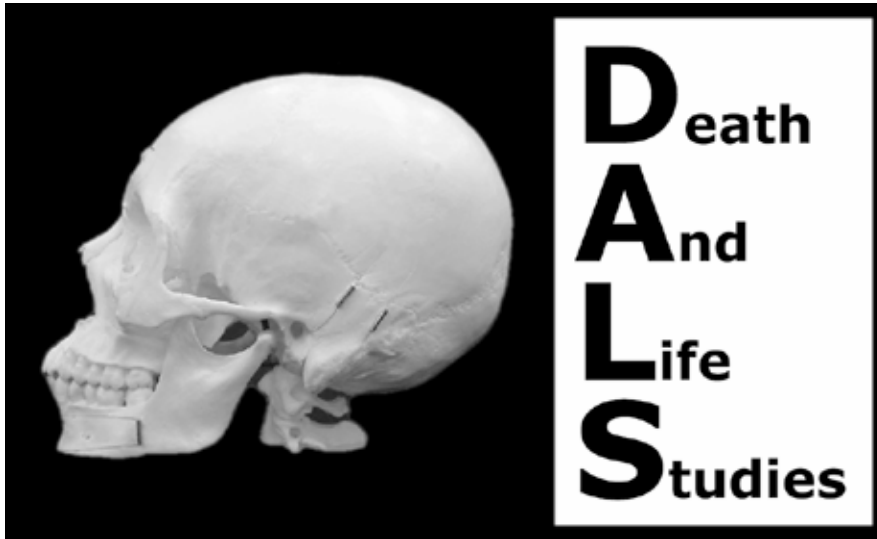
林 徹 <言語学>

赤林 朗 <医療倫理学>

甲斐 一郎 <健康科学>

西平 直 <教育学>

秋山 弘子 <社会心理学>



「DAL S ニューズレター」  
第 9 号  
平成 1 7 年 5 月 9 日発行  
東京大学大学院人文社会系研究科  
2 1 世紀 C O E “ 生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築 ”  
責任者 島 蘭 進  
TEL & FAX 03-5841-3736